

ダーウィンの悪夢

2006(平成18)年11月7日鑑賞(東映試写室)



監督・構成・撮影＝フーベルト・ザウパー（ビターズ・エンド配給／2004年フランス、オーストリア、ベルギー合作映画／112分）

……タイトルからはサッパリわからないが、これはアフリカのビクトリア湖に放たれた外来種の巨大魚ナイルパーチを素材として、「弱肉強食」「適者生存」の法則の問題点をえぐり出した驚愕のドキュメンタリー映画。私たち日本人も口にしてこの魚の加工産業の進展が、地元の繁栄をもたらさないばかりか、逆に失業・貧困・売春・エイズ・ストリートチルドレンという負の連鎖を生み出しているという現実を知れば、あなたもきっと衝撃を受けるはず……。無知がいかにか恐ろしいことか、そして飽食の時代がいかにか罪であるかをあらためて考え直すいいきっかけにしたいものだが……。

問題提起型のドキュメンタリー映画が次々と……

去る10月23日に観た『エンロン』（05年）は、エンロン社崩壊という生々しい現実の事件を関係者のインタビューを中心として真っ向から切り込んだ問題提起型作品だった。そして、この『ダーウィンの悪夢』も、アフリカ中部の国タンザニアにある世界第2位の淡水湖ビクトリア湖に、ナイルパーチという巨大な外来魚が放流されたことがきっかけとなって起こった悪夢のようなグローバリゼーションの連鎖を興味深く描くもの。

ちなみに、このナイルパーチは日本でも、味噌漬けや白身魚フライの材料として外食産業や給食用に広く使われているとのこと。近年、琵琶湖に登場した外来魚ブラックバスをめぐる騒動は日本人の記憶に新しいところだが、こんなナイルパーチによる大騒動がアフリカに発生し、その連鎖がこの地球全体に及んでいることなど、全く思いもよらなかったもの……。

長編ドキュメンタリー賞のノミネートは当然だが……

『ダーウィンの悪夢』は、2004年ベネチア国際映画祭ヨーロッパ・シネマ・レーベル賞受賞をはじめとして、2006年セザール賞最優秀初監督作品賞を受賞し、アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞にノミネートされたが、この作品の問題提起の大きさと衝撃度を見れば、それはある意味で当然……。しかし、ドキュメンタリー映画としての完成度から言うと、その評価は別。さて、これがアカデミー賞最優秀長編ドキュメンタリー賞を獲得できるかどうか、他のノミネート作品と対比しながら注目しなければ……。

なぜこのタイトルが……？

ビクトリア湖は多様な生物が生存している宝庫であるため、「ダーウィンの箱庭」と呼ばれているとのこと。そしてその中に、今から50年ほど前に些細な試みから大食で肉食のナイルパーチという大型の魚が放流されたことによって、湖の生態系が激変することになった。

すなわち、それによってそれまで生息していた多くの魚が駆逐されるとともに、ナイルパーチが大量に繁殖したため、湖畔のまちにはナイルパーチの加工工場が誕生し、一大魚産業の町になったわけだ。

ダーウィンの進化論を生物学的な意味合いだけではなく、このような経済的・社会的そして世界的な視点で捉えたのが、この映画の面白さ。「加工工場の集中⇒労働力の集中⇒地元経済の繁栄」となればいいのだが、このビクトリア湖畔のまちにおける経済的・社会的「進化論」の実態は……？

フーベルト・ザウパー監督の視点はさらに……

この映画には、地元のナイルパーチ加工工場のオーナーであるディモンが登場し、この町におけるナイルパーチ産業の実態を誇らしげに語っている。しかし同時に、船を持たないのに漁業キャンプ場に群がる男たちや、それを目当てに売春する女たちが次々と生まれ、そこから貧困とエイズそして多くのストリートチルドレンであふれかえることに……。

これこそ、まさにダーウィンの進化論がいう、「弱肉強食」「適者生存」の理論の社会版だ……。

工場で加工されたナイルパーチの輸出はヨーロッパが中心で、飛行機によって大量に輸送されていくが、フーベルト・ザウパー監督が注目したのは、その見返りは何かということ。適正な価格で加工品が販売・輸出されていれば、タンザニアには膨大な外貨が入ってくるはずだが、現実はそのようではなく、入ってくるのはアフリカ各地で今なお続いている軍事紛争に使用するための武器ではないか、そう目をつけたのがザウパー監督の秀逸な視点。

しかして、この映画の登場人物には、ナイルパーチ輸送機のロシア人機長のセルゲイやジャーナリストのリチャード・ムガンバそして元ストリートチルドレンで、今は町で唯一の画家となっているジョナサンも登場するから、彼らの発言に注目を……。

興味を持つこと、知ることが第一歩……

この映画が描くナイルパーチという魚をめぐる、ダーウィンの法則どおりに生まれている弱肉強食の姿を知っている人は、日本人にはまずいないはず……。しかし、私たちが日常的に口にしている食料品や加工品には、このナイルパーチと同じような問題を抱えたものがたくさんあるのでは……？ そして現実に、ナイルパーチは日本にも輸出されているとのこと。

日本人は例えば捕鯨が制限されたことに対して危機感を訴えたり、マグロの価格が急騰していることに対して恐れおののいているが、私たちにとって何よりも大切なことは、なぜそうなったのかについて興味を持ち、知ること。もちろんそれを知ったからといって、直ちに良き解決法が生まれてくるわけではないが、「我関せず」という姿勢は最悪だし、知らないままというのは一種の罪悪だと考えなければならないのでは……？

そう考えると、地球温暖化問題、酸性雨問題、異常気象問題等々、地球上の大問題について私たちが知るべきことは山ほどある。この映画がそんなことを考える第一歩になれば、アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞ノミネートにふさわしいことになるし、ザウパー監督も大喜びするのでは……？

売春婦の悲劇とコンドーム……

この映画は『エンロン』と同じようにインタビュー形式で構成されることが多いが、前半の注目点の1人は売春婦のエリザ。「……きっとこの生活を続けるしかないのよ」と言いながら、彼女は輸送機のパイロットたちを相手にたった10ドルで売春して生活費を稼いでいるが、日本の風俗業界のようにルールがきちんと確立していないアフリカ(?)では危険がいっぱいで、時には客から暴力を受けることも……。現にエリザはある時、ある客によって犠牲に……。

他方、興味深いのが、漁業キャンプの牧師カイジャゲ。キリスト教が墮胎を禁止していることはよく知られているが、カイジャゲ牧師の解釈によれば、「神に従えばコンドームも罪だから、コンドームは勧めない」とのこと。したがって、「売春をやめるよう」に言えても「コンドームをしろ」とは言えないということだが、こんな教条主義的な解釈はちょっとおかしいのでは……? もっと現実に対応して実践的な説教をしなければ、牧師失格……?

飽食の時代は大きな罪だと確信!

高度経済成長の時代から土地バブルの時代を経た日本は、大きな財政赤字を抱えているクセに、日本は豊かな国だと錯覚し、有り余るモノの中で暮らし、飽食の時代が続いている。「飽食」が健康上よくないことは、近時メタボリックシンドロームの警鐘が打ち鳴らされていることでも明らかだが、それ以上に道義上・倫理上許されないことが、この映画に登場するストリートチルドレンたちの姿を観ているとよくわかる。

ビクトリア湖のナイルパーチを食べることができるのは外国人ばかりで、地元の人たちの口に入るのは頭や骨などの残骸だけ。それでも、ストリートチルドレンたちは先を争ってそれを食べようとするため、スクリーン上には多くの子供たちが1杯のバケツの中のぞうすいのような食べ物をめぐって殴り合いのケンカをする様子が描かれる。

有り余る食べ物に囲まれたホテルのパーティーの後、惜しげもなく「残り物」を廃棄している今の日本の姿と対比すれば、この映像は大ショック。あらためて、

新しく滋賀県知事に選出された嘉田由紀子氏ではないけれど、「もったいない」という言葉を復活させる必要性や、飽食の時代はそれ自体大きな罪だと確信した次第……。

日本版『ダーウィンの悪夢』の強調には大反対……

この映画の問題提起にヨーロッパをはじめ全世界が震撼したのは当然だが、そうかといってこの映画は具体的にナイルパーチの加工体制の何を、どう変えろと主張しているわけではない。その意味では、ダーウィンの進化論にいう「弱肉強食」「適者生存」は、生物学的にも社会的にも現実になお生きている法則だということだ。

ところが、日本人はキリスト教の厳格さやダーウィンの進化論の厳格さを好まず、日本流の「まあまあ思想」(?)によって、コトを丸く収めようとするやさしい民族……? したがって、国のリーダーたるべき政治家たちも「調和型」の人たちが増えているから、織田信長や小泉純一郎のような「信念型」には反対者が出るのは当然……。

安倍晋三総理は「ポスト小泉」を何とか無難に実現させたが、今悩んでいるのは格差社会の是正であり、昨年9・11総選挙をめぐって発生した造反議員たちの自民党復党問題。

これらの問題について、『ダーウィンの悪夢』という形で自由競争をマイナス評価すれば、たちまち日本は昔の「まあまあ型社会」に逆戻りする危険があるだけに、私はダーウィンの法則による「弱肉強食」「適者生存」はあくまで真実だという原則を貫き通す必要があると思っている。したがって、私は日本版『ダーウィンの悪夢』の強調には大反対だが……。

2006（平成18）年11月7日記